

第六十三話 令和元年 十二月八日

【沼津兵学校<四> 生徒の出自】

ご先祖さんが沼津兵学校と縁{ゆかり}あった拙者にとって【沼津兵学校】は 語っておかねばならぬ明治維新の一隅である。

前回、留学生の資業生、資業生試験を記したが、沼津兵学校資業生のほとんどは幕末、黒船来航以来、人材登用、組織改革を経て、幾度となく門閥打破の末に選ばれた人材であった。ゆえに多種多様な出自を持っていた。

歴史モノで馴染みのある八王子千人同心の頭を勤めて十一代目当主。同じく千人同心頭十四代目当主(地区がことなる)。

伊賀者の家柄、服部半蔵配下であった子孫。御庭番から初代新潟奉行になった四男。浦賀奉行所同心の家の十代目。

禄高一千三百国旗本、長崎奉行、外国奉行を勤めた子。幕府鉄砲頭の家柄で講武所砲術指南役。幕府代々御鳥見役家の七代目。幕府与力の子。実の兄は浅草花屋敷の造園家。一橋家剣術教授方頭取。兵学者高島秋帆の兄の息子。

甲斐国の医師の子で、旗本に使えた後、御家人家を相続した者。武蔵国多摩郡の名主の子から幕府書物奉行になった者の孫。

キリがないのでこの辺で。

幕府に仕えた様々な家柄を出自とした者たち。多くは中下級の旗本・御家人。中には父祖の代、また自身の代に庶民から武士身分になった者も少なくない。

江原素六がこんな逸話を講演している。

沼津出自の士族の後家さん。毎朝台所のカマドを炊きつける前に、子らのために机を並べ、子らが目覚めて朝ごはんまで、習字、算術、読本が出来るように、一日も怠りなくした。子らは二人とも博士になる。

明治維新は倒幕で成し得たわけでない。元幕臣が核としてあった。

その“証拠物件”が沼津兵学校である。